

慰満奴恵留（インマヌエル）

榎 本 恵

奨励者紹介〔えのもと・めぐみ〕

アシュラムセンター主幹牧師

日本キリスト教団牧師

イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。

その名はインマヌエルと呼ばれる。」

この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れ、男の子が生まれるまでマリアと関係することはなかった。そして、その子をイエスと名付けた。

（マタイによる福音書 1章18—25節）

名前のもつ意味

私たちは、皆名前をもっています。それは人間の尊厳であり、ある意味においては、その名が、その人の人格や運命までも決めるほどに重要なものとなることもあります。牢獄に入れられた囚人は、その名前ではなく、番号で呼ばれるそうです。番号には、人格や個性はなく、ただ順序を表すのみです。それは彼らを人としてではなくモノとして見ているということにほかありません。名前をもつということは大変重要なことなのです。

ところで、皆さんはご自分の名前の由来をご存知でしょうか。おそらくここには、自分で自分に名前をつけた人は、おられないと思います。いや、中には、成人してから改名された方もいるかもしれませんが、基本的に私たちは、その名前を誰か他の人によってつけられたのです。ご両親や祖父母、また中には牧師に名前をつけてもらったという方もおられるでしょう。

いずれにしてもそこには、名前をつけた人たちの思いや願いが込められているはずです。もちろんそれが、本人にとって嫌なものであったり、気に入らないこともあるかもしれませんが。私もどちらかというこの「恵」という名が嫌でした。今でも、時々、説教の後、私のところに訪ねてきて、私の顔をまじまじと眺めながら「先生、男性だったんですね」と言われる方がいます。もうそんな時は、皆様のご想像とは違ってすみませんでした、と謝るしかありません。しかし今では、この名前が大変気に入っていますし、誇りに思っています。

こんな話を、この間、保育士の新任オリエンテーションでしたら、一人の保育士の方が来られて、「私も名前で苦労したんです」と言ってこられました。「一体どんな名前なの」と聞くと、「えりです」と言うんです。「えりなんて、いい名前じゃないの」と言いましたら、彼女は訴えるような眼をして「違うんです、苗字が岡なんです」と。「岡えり」「お帰りか」。

まあ、笑うに笑えないですけども、お父さんは大変ユーモアのある人だね、と言っておきました。

さて、今日お読みした聖書の箇所は、大変有名な箇所であります。初めて聖書を手にした人の、第二の関門と言われる箇所です。第一の関門は、この前に書かれている長い系図。キリスト教作家の三浦綾子さんは、誰しもが、どんな愛の言葉があふれているのだろうと期待し開いた聖書の読む気力を失う最初の関門がこの舌を噛みそうになる系図であるとお書きになっています。「私は(中略)しかたなしに読んだ。(中略)これだけ読むにも、人間はずいぶんと退屈することを知った。それで途中から、自分の恋人にするならば、どんな名がよかろうと、まことに不真面目な態度でようやく読んだのである。(ウジヤなんて、いただけないな、ゾロバベルなんて、気持ちが悪いな)」（『新約聖書入門 心の糧を求める人へ』 光文社文庫 1984年）。彼女はこんなふうに聖書を読み始めた時のことを告白しています。

そして、次のつまずきがいわゆる、乙女マリアが聖霊によって妊娠したという処女懐胎というにわかには信じられない、イエスの誕生物語であると書いておられます。

もちろん、今では、研究が進み、本来は若い女性という意味であった言葉を、処女を意味する乙女と訳したということが、このイエスの誕生物語のインマヌエル預言の背景にあるということですが、ただそれだけでは、この主イエス・キリストの誕生物語がなんだか無味乾燥なモノになってしまうのではないのでしょうか。私たちは、「イエス」（主は救い）と名付けられたイエス・キリストのもう一つの呼び名、「インマヌエル」（神は我々と共におられる）という名前の意味をとおして、今日この主の誕生物語をもう少し深く黙想し、味わってみたいと思います。

森の木々が

風に揺れ動くように

さて、この「インマヌエル」という言葉が最初に使われるのは、旧約聖書イザヤ書の7章です。B. C. 733年、エルサレムの町は、隣国アラムと兄弟の国である北イスラエルの軍によって包囲されます。同盟し共に当時の新興国アッシリアと戦おうではないかという呼び掛けを断った南ユダの王アハズを、両国は追い詰め、エルサレムの町に彼らの大軍が攻めてくるのです。その知らせが王の耳に届いた時、エルサレムの町は非常な恐怖に陥りました。聖書は、それを「王の心も民の心も、森の木々が風に揺れ動くように動揺した」（イザヤ書7章2節）と記すのです。今から3000年近くも前の人々の、表現力の豊かさに驚かされますが、「森の木々が風に揺れ動くように」という表現は、まさにその当時のエルサレムにいた人々の心理状態を言い当てているのではないのでしょうか。そんな絶体絶命の危機迫る中、登場するのが預言者イザヤなのです。彼は、アハズ王を川辺に呼び、神の言葉を告げるのです。

その時語られた神の言葉が、時を超え、自分の許婚の突然の妊娠に驚き悩む、正しい人ヨセフに向かって告げられるのです。彼もまた、ダビデ王の家系につながる人でありました。先ほど触れた、イエス・キリストの系図の中には、アハズ王もヨセフも、ダビデの系図に属するものであることが書かれています。しかし正しい

人ヨセフに対し、アハズ王は、「父祖ダビデと異なり、自分の神、主の目にかなう正しいことを行わなかった」（列王記下16章2節）と、列王記は記すのです。正しくない彼は、この危機的状況に際して、イザヤの預言の言葉に聞き従わず、敵国アッシリアに助けを求めました。そしてそのことが後々に起こる北イスラエルとユダの捕囚へとつながっていくのです。「ダビデの家よ聞け。あなたたちは人間に／もどかしい思いをさせるだけでは足りず／わたしの神にも、もどかしい思いをさせるのか。それゆえ、わたしの主が御自ら／あなたたちにしるしを与えられる。見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み／その名をインマヌエルと呼ぶ」（イザヤ書7章13—14節）。これが、イザヤの語った神の言葉であったのです。神にもどかしい思いをさせる人間、見えなもののよりも、見えるものを頼りとしてしまう人間のもどかしさ、それはいつの時代も変わらぬ人間の姿なのではないでしょうか。

ところが、このイザヤの預言の言葉が、今、主イエスの誕生によって実現したのだと、マタイは証言するのです。そして彼は、この福音書全体を、このインマヌエル（共におられる主）をテーマに語り続けるのです。荒れ狂う湖の上でも、道端の麦を安息日にとって食べたその道でも、また主の十字架の死を知り落胆し帰る途上の弟子たちにも、イエスは共におられるのです。そしてマタイは、復活し、再び弟子たちに現れたあと、天に上る最後の主の言葉をこう記し、福音書を書き終えるのです。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」（マタイによる福音書28章20節）と。これが、マタイの描く、主イエスの生涯であり、その生涯を貫く救いの使信、すなわち「インマヌエル」（神は我々と共におられる）ということなのです。それは、その誕生の時から、昇天の時に至るまで、神の約束として、今を生きる私たちにも与えられたものなのです。

信じるのにもどかしく、理屈ばかりを捏ね、見えるものだけを頼りにし、問題が起ると「森の木々が風に揺らぐように」オロオロし、不安と恐れに苛まれる私たちに、「インマヌエル」神は我々と共におられると、力強く叫ぶ声が聞こえてくるではありませんか。

志方(しかた)之善(ゆきよし)と

インマヌエル村

さて、かつて北海道にこのインマヌエルの名前を戴いた開拓村があったのをご存知でしょうか。今は、瀬棚郡今金町神丘（せたなぐんいまかねちょうかみおか）という名前になっていますが、今から100年以上前に、利別川流域に開拓に入ったキリスト者たちによって作られた村があり、今もその名残があります。このインマヌエル村の開拓団を組織し、その名をつけたのが、私たち同志社の大先輩である志方之善という人でありました。彼は、日本初の女性医師として有名な荻野吟子と18歳の年齢差を超え、結婚したことでも知られる人物であり、その生涯を描いた映画が最近公開されています。彼は肥後熊本の出身で、1890年の新島襄の最期にも立ち合い、新島から洗礼を受け、神学部で学んでいた熊本バンドの一人でもありました。ところが彼は、新島の死後、「新島先生なき同志社は存在の意味のない廃屋も同然だ」と、1年後の卒業を待たずして、北海道開拓へ出かける計画を立てるのです。無論、その計画に対し大勢は批判的でありました。彼が学業半ばで、志を捨て夢のような開拓に向かうことを心配し、当時の金森通倫校長をはじめ、多くの先生また同級生は反対しました。確かに、その後の志方の人生を思うと、この計画の若さゆえの無謀さ、そして内部分裂と、創設者本人である志方自身が、そこを去らなければならないという理不尽の経験は、彼の人生にとっても、またインマヌエル村にとっても失敗という烙印を押されねばならないものであったことは、間違いのな

いことでしょう。

後に復学し、牧師となって北海道へ赴任するものの、42歳の若さで急逝してしまった彼の生涯は、苦難と挫折の人生であったというほかありません。

けれども、ほとんどの人が彼を見放す中で、ただ一人志方を認め、応援する人がいたのです。それが、新島襄の親友であり、日本に帰った新島の同志社設立の想いに賛同し、彼を助けるべく遥々アメリカからやってきた、J・D・デイヴィスでした。デイヴィスは、アメリカ開拓者ピルグリム・ファーザーズの子孫であり、志方たちの志の中に、自分の原点を重ね合わせたのかかもしれません。「人の価値は、その人がどれほどの力、知識・才能があるか、すでにどのような仕事の実績をあげているかということできまるものではない。その人が何を望み、なにをしようとしているかということによって判定せられるものである。成功・失敗を気にするような卑しい心がけなら、始めからなにもしないことである。真に気高い人物は、自分の願望した結果を見ずして死ぬ覚悟をしなければならない。それが清教徒の精神であり、真の基督者であった新島先生の生涯でもあったのです。志方君とその願望の上に、主の祝福を祈ります」（『悠久なる利別の流れ 日本キリスト教団利別教会百年史』日本キリスト教団利別教会 1994年）。日本キリスト教団利別教会百年史をお書きになり、北海道開拓史の研究をされていた木俣敏先生は、デイヴィスの言葉をこのように書き残しておられます。

同志社大学には、このような諸先輩と教職員の麗しい伝統が今も続いていることを期待するものでありますが、さて皆さんはどう思われるでしょうか。いずれにせよ、この人間の本当の価値、そして成功か失敗かという結果ではなく、その純粋な心がけこそが大事であることは、インマヌエル神と共にいるという信仰をもち続ける、キリスト者の生き方そのものなのではないかと思います。

慰めに満ちる

神の恵のうちに留まる

主の奴隷

今回、私の説教題にしました「慰満奴恵留」とは、戦時中、敵性語を使ってはならないとされた時代に、漢字表記されたインマヌエル村の字です。「慰めに満ちる神の恵のうちに留まる主の奴隷」とでも訳しましょうか、それはまさに「インマヌエル」神が我々と共におられるという言葉にふさわしいものではありませんか。どんな困難をも、挫折をも、失敗をも乗り越えさせ、ただひたすら主の奴隷として働いた、志方之善たちが見いだしたのは、最も慰めに満ち、彼らを愛し恵み給うた神の共におられる姿だったのです。風に木々が揺れ動くような時もあったでしょう、見えるものに頼り、その力や知恵や人脈によってことを為そうとしたこともあったに違いありません。しかし、その都度、彼らは帰っていったのです。インマヌエルの神に、共におられる主に。

先ほど紹介した、利別教会百年史を編纂された木俣先生は、こうインマヌエル村を総括されます。「インマヌエル（神偕に在す）基督教理想郷のヴィジョンも所詮、失敗を運命づけられていたのである。それにも拘らず、否それゆえにこそ、今も神の国はこの地に生きつづけ成長しつづけているのである」（同）と。

まとめの句

さて、私たちは、この「インマヌエル」という言葉をどう受け止めるでしょう。もちろん大学というアカデミズムの地では、神学的に、また学問的にそれを探求することこそがその本分であるでしょう。私も、皆様方に志方

のように、学校を辞めて世界に、開拓に出ていきなさいということを勧めるものでは決してありません。しかし、誤解を恐れずに言うならば、もしあなたが人生の道行の中で、風に揺らぐ木々のように心が動揺しているなら、またどう生きるべきか、また何をすべきなのかということを前に、もどかしさを感じているならば、そこに必ず、「インマヌエル」神は我らと共にいると言い、かつて若き志方之善のためにデイヴィスが祈ったように、「あなたとその願望の上に、主の祝福を祈ります」と私は祈りたい。どうか、インマヌエルの神を信じ、歩むものとなってください。

2019年12月18日 今出川水曜チャペル・アワー「アドベント礼拝奨励」記録